

ワークショップ3

特設Webサイト「献血ってそうなんだ」 ～伝えたい気持ちを伝えたい人たちに～

池田真実, 中岡直喜, 村井貴吏, 松田清功, 駒田 修, 保坂勇一, 龍 延博, 河 敬世
(日本赤十字社近畿ブロック血液センター)
毛藤もと子(兵庫県赤十字血液センター)

【目 的】

従来の献血啓発に係る広報活動については、献血の協力呼びかけにより、必要な血液量が確保できていない現状を伝え、献血に来ていただくというものであった。しかし、献血の動機が「呼びかけをしていたから」や「献血をすると記念品がもらえるから」となる場合、継続的な確保および自発的な献血行動には繋がりにくいことが課題として挙げられる。

そこで、“献血がなんのために、誰のために必要であるか”を一般の方々に解りやすく伝えることで“気づき”を与え、自発的な献血行動に結びつける

ことを目的に、近畿ブロック統一計画として、管内で献血啓発に係る統一広報事業を行った。今回は、同計画の一環である特設Webサイトの作製について報告する。

【内 容】

始めに、近畿ブロックにおける献血啓発に係る広報事業については、広域事業体制となる以前から近畿ブロック管内の受血者にご協力をいただき、献血者に向けたメッセージとして「感謝の声」を集めた小冊子、ポスター等の作製を行い、近畿管内における広報資材と活用してきた。広域事業運営



図1 特設Webサイト「献血ってそうなんだ」トップページ

体制となった平成24年度からは、従前からの取り組みに加え、献血の必要性和意義を多くの方に伝えと同時にスケールメリットを活かした近畿ブロック統一広報事業として「献血ってそうなんだ」と称し、近畿ブロック管内でさまざまなプロジェクトを展開しており、特設Webサイト(図1)についても同事業の一環である。

特設Webサイト構築の基本コンセプトは、受血者の声を体験談としてインタビュー形式を用いて収録し、「受血者からの生の声」を「ありがとうの声(図2)」として発信し、多くの方に献血の必要性和意義を伝える構成を基本とした。そして、多くの方は「献血した血液は事故や大怪我の際に使われているのではないか」といったイメージを持っているが、「輸血の多くは継続的に輸血を必要とする病気に使われている事実」を輸血の疾病別に表したグラフで特設Webサイトのトップに表示し、視覚的にも印象に残る構築に努めるとともに、特設Webサイトに誘導させる施策を強化した。

方法としては、特設Webサイトのアドレスを刻印したQRコードのハンコを作製し、既に作製済

の広報資材(ポスター・チラシ等)にスタンプできるようにした。その他の取り組みとして「献血ってそうなんだ」の特製ポスター、オリジナルCM、映画上映前に行う広告(シネアド)等、さまざまな手法を用いて特設Webサイトへの誘導させる施策を行った。特設Webサイトの掲載内容については、以下のとおりである。

1. ありがとうの声

(1) 受血者のムービー

(2) 受血者のメッセージおよび写真

2. 献血のゆくえ

献血された血液の80%以上は病気の治療に毎日使われているということ。

3. 献血ルーム・献血バスの一押しポイント

近畿ブロック管内の献血場所を知るための、地域血液センターのホームページにリンクするバナーを設置した。

4. Webページ共有ボタン

SHAREからはじまるボランティアとして、facebook, twitter, googleplusでページを共有できるようにした。



図2 ありがとうの声掲載ページ

【結果および考察】

今回の特設Webサイトは、近畿ブロック血液センターが稼働した当初より運用しているWebページから、バナーをクリックしてご覧いただくか、検索窓で「献血ってそうなんだ」というキーワードを検索していただくことにより表示される。当計画は平成24年度から実施しているものの、一般の方への認知度はまだ低いのが現状である。そのため、特設Webサイトを閲覧する方が少なく、平成26年2月末の時点で閲覧数は2,046件であった。閲覧者数が想定より低かったため、今後、特設Webサイトへ誘引させる施策としては主に以下の3点を考えている。

1. 冊子の活用

昨年度に1万部作製し各種献血団体等に配布したところ大変好評だったため、増刷の依頼が地域センターからあり、今年度1万部の増刷を行った。冊子を単なるパラマキ資材とせず、“献血がなんのために、誰のために必要であるか”を知っていただくことにより、安定的な輸血用血液の確保の一助とする。

2. 献血者への周知

献血者への周知については、「献血の行方」と「あ

りがとうの声」を多くの方に伝え、各地域センターの採血確保の後押しとなる取り組みを展開することを目指しているが、具体的な内容については未定である。

3. 受血者の講演

やはり実際に受血者から直接話を聞くというのは、私たち職員が「こんな話があって……」と話すよりも格段に説得力がある。本企画にご協力いただいた受血者は積極的にご協力いただける方が多く、中には普段学校教師をされているため、人前で話すことが苦にならないばかりか、年代に応じた講演をしてくださっている。今年度は全国学生献血推進協議会代表者会議でご講演いただき、聴講した学生からは、「ぜひ、うちの県でも講演していただきたい。」との意見があった。

また、昨年度は実現に至らなかったため現在は非表示となっているが、特設Webサイトには「職員からのメッセージ」を掲載するページがある。今後は、このページを活用することにより、受血者・献血者・そして職員が双方向に繋がりあうことができるものとし、特設Webサイトを「ありがとうを橋渡しできるもの」にしていきたいと考える。受血者たちの出会いを一過性のものとせず、これからもこの繋がりを大切に育てていきたい。